時流を読む

果樹地帯でも始まった耕畜連携

農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷 栄一

子牛による〝舌刈り〟

山梨県といえば果樹王国であり、畜産とは縁が薄い地域ではあるが、ここでも家畜を導入する動きが見られるようになってきた。

甲州市勝沼は甲府盆地の東端にあり最も東京寄りとなるが、いくつものワイナリーが集中していることが象徴するように、ブドウの一大産地である。ここでは生食での出荷、観光農園、そしてワインをはじめとする6次産業化への取り組みがすすめられてきたが、ここもご多分に洩れず担い手の高齢化よりブドウ園や畑等の耕作放棄化がすすみつつある。

NPO法人えがおかつぬまは、ここに子牛を放って、雑草の〝舌刈り〟を始めた。これにともなう電柵設置作業や餌作り・餌やりは、農作業やワインの仕込み体験等とセットにしてプログラム化し、首都圏に住む援農希望者に開放するとともに、貴重な都市農村交流の場ともなっている。

〝紅露柿〟と牧場

もう一つの取り組みは勝沼と同じ甲州市にある松里でのポニーを導入しての牧場づくりである。松里は勝沼よりも北の山寄りにあり、霧が発生しやすい。この風情を醸し出している。枯露柿を吊るし始める頃になると、静かな山里は一変して、カメラと三脚を抱えたたくさんの人たちでにぎわうようになる。

ここで枯露柿を〝紅露柿(くろかき)〟というブランドで生産・販売しているこはブドウではなく百匁柿(ひゃくめがき)というソフトボール大の大きな渋柿を原料にしての枯露柿の産地である。百匁柿を剥いて、ヘタをナワでつないだものを軒先にスダレのように吊るした風景は、白壁漆喰の古民家に馴染んで独特の

法人・然企画(ぜんきかく)が、柿畑の中に牧場をつくり、ポニーとともにヤギを2頭放っている。〝ハーモニー〟という名のポニーとヤギに触れ合うこともできる。代表の荻原さんによれば「動物が気持ちいいところは、人間も気持ちいい」ということで、登下校の小学生から高校生まで、さらには通りがかりに車を止めて牧場を眺め、一息ついていく人も少なくないという。「商品を売るのではない、物語を売るんだ」という経営方針を、農薬・肥料に頼らず、硫黄による燻蒸処理をしない昔ながらの製法へのこだわり、そして動物たちとの協働がリードする。

潜在力を秘める耕畜連携

この3月に策定された酪肉近代化方針では、やっと放牧に焦点が当たり始めた感がある。飼料の自給化、水田等農地の有効活用として、目下、飼料用米に注力されているが、これから先の耕畜連携の主役を担うのは放牧である。そして本事例が示すように耕畜連携は放牧に限らず多様な展開が可能であり、着実に進展しつつある。日本の農業および畜産構造の変革が必須の情勢にあるが、そのカギは耕畜連携が握っていると考える。